

胃癌術後に発症した転移性大腸癌の1例

◎錦 昌吾¹⁾、森 雅美¹⁾、中尾 由佳¹⁾、井西 千晶¹⁾、山田 沙由理¹⁾、蕪木 理子¹⁾、櫻井 亮太²⁾、武藤 一輝²⁾
医療法人 宝生会 PL病院 中央臨床検査部 生理機能検査科¹⁾、医療法人 宝生会 PL病院 病理部²⁾

【はじめに】大腸は転移を受けにくい臓器とされており、転移性大腸癌は稀である。今回、我々は胃癌術後1年目に発見された転移性大腸癌の1例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。【症例】60代男性。既往歴：2017年7月に1型進行胃癌に対して幽門側胃切除術が施行された。現病歴：2018年5月に約1ヶ月間持続する左側腹部痛にて来院され、精査となった。来院時検査成績：CEAが5.37ng/ml、CA19-9は52.2U/mlと高値を認めた。Hbは11.9g/dl、Hct値は36.9%と貧血を認めた。【腹部超音波検査所見】横行結腸前壁に3×2cm大の腫瘍を認め、層構造は粘膜から粘膜下層まで確認できなかった。筋層において層構造は確認できたが、一部不明瞭であった。腫瘍は境界明瞭で輪郭不整であり、内部は低エコー不均一であった。また、左側腹部痛に一致して腹壁直下に2cm大の腫瘍を認めた。腫瘍は境界明瞭、輪郭不整で、内部エコーは低エコー不均一であった。【下部消化管内視鏡検査】横行結腸に2型の進行大腸癌を疑う腫瘍を認めた。生検では大腸癌と診断された。2018年6月に横行結腸癌と腹壁の腫瘍に対し

て部分切除術が施行された。【病理学的所見】横行結腸および腹壁の腫瘍共に高分化型の管状腺癌であったが、免疫組織検査ではCK7は陽性、CK20は陰性であり、前年に切除した胃癌と組織型、免疫組織検査の結果が一致していた。したがって胃癌の横行結腸転移及び腹膜転移と診断された。【考察】転移性大腸癌は稀であり、全大腸癌のうち0.1%～1%と言われている。胃癌による大腸への転移様式は直接浸潤や腹膜播種によるものが多く、その際、腫瘍細胞は腸間膜側から漿膜面へと浸潤する為、転移巣は粘膜下腫瘍状となり壁外性発育の形態となることが多い。しかし本例の病理所見では、腫瘍には粘膜から粘膜下層主体に腫瘍細胞が見られ、筋層や漿膜側にはわずかししか見られなかった。超音波画像においても腫瘍は粘膜から粘膜下層主体であり、筋層は一部不明瞭ではあったが比較的層構造が保たれており病理所見と一致していた。このことは血行性又はリンパ行性に転移し、粘膜から粘膜下層主体に腫瘍細胞が増殖し、原発性大腸癌と類似の形態を呈したのではないかと推察された。連絡先：PL病院 中央臨床検査部 0721-24-3100